



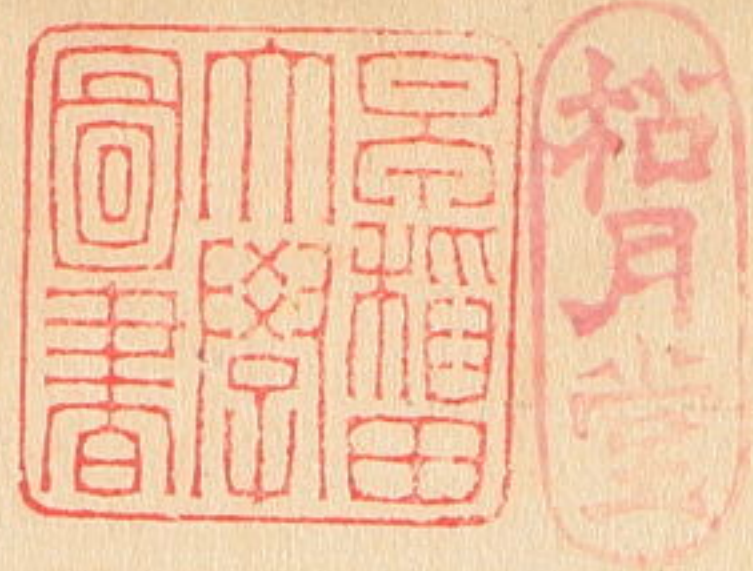
二園七高僧傳圖會

震旦之卷

二

漢
605
2





三國七高僧傳圖會震旦之卷目錄

曇鸞大師傳

第一 南北兩朝歷代

第二 曇鸞達梁朝謁武帝

第三 逢菩提留支曇鸞燒仙經

第四 魏帝崇曇鸞葬秦陵文谷

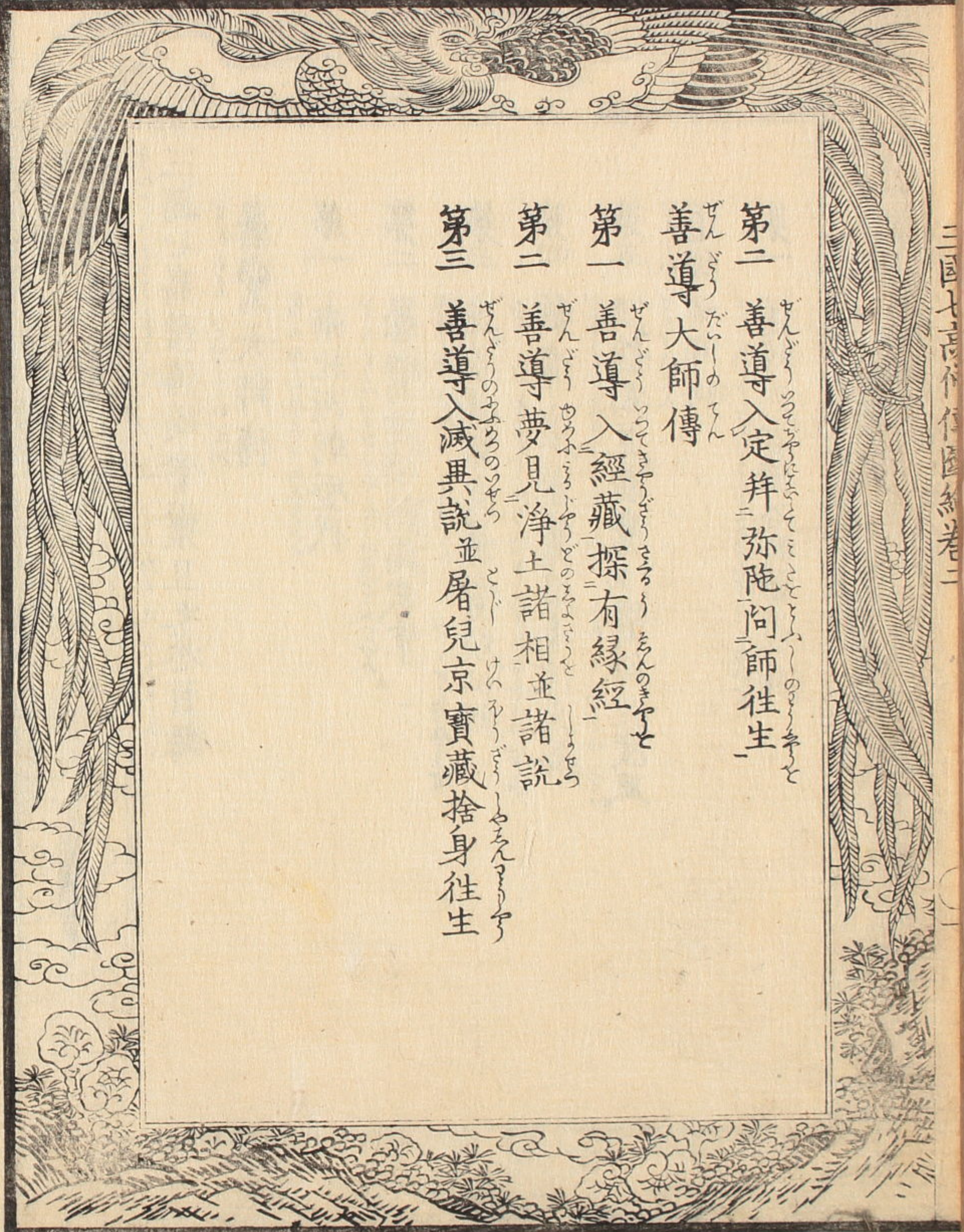
第五 現龍樹見曇鸞並鸞師化度風

道綽禪師傳

第一 道綽到石壁谷拜鸞師碑



南朝梁武帝



- 第二 善導入定并弥陀問師往生
善導大師傳
- 第一 善導入經藏探有緣經
- 第二 善導夢見淨土諸相並諸說
- 第三 善導入滅異說並屠兒京寶藏捨身往生



墨齋大師
江南德陶隱居



菩提流支三藏





長安屠兒
京窟藏

三國七高僧傳圖會震旦之卷

杓杞菴一禪居士編輯

曇鸞大師傳

續高僧傳第七義解曰魏西河石壁谷玄忠寺釋曇鸞武為密未詳其氏雁門人家近五臺山神迹靈怪逸于民聽時末志學便往尋焉備覲遺蹤心神歡悅便即出家內外經籍具陶文理而於四論佛性殊所窮研乃至

曇鸞大師北魏の代の人にして始ハ四論宗なり。後ハ菩提流支三藏の教ありて四論の講説と闕シ聖道を行と捨て本願他カヲ飯一。一向專念の宗風と弘めり。北魏とハ南北朝の魏の代なり。南北朝とハ晋宋齊梁陳隋の六代と南朝と。又六朝とも云。此とハ同時ハ北朝ハ六代あり。後魏東魏西魏後梁北周後周等なり。此時天下ニ分れて揚子江より南と南朝と北と

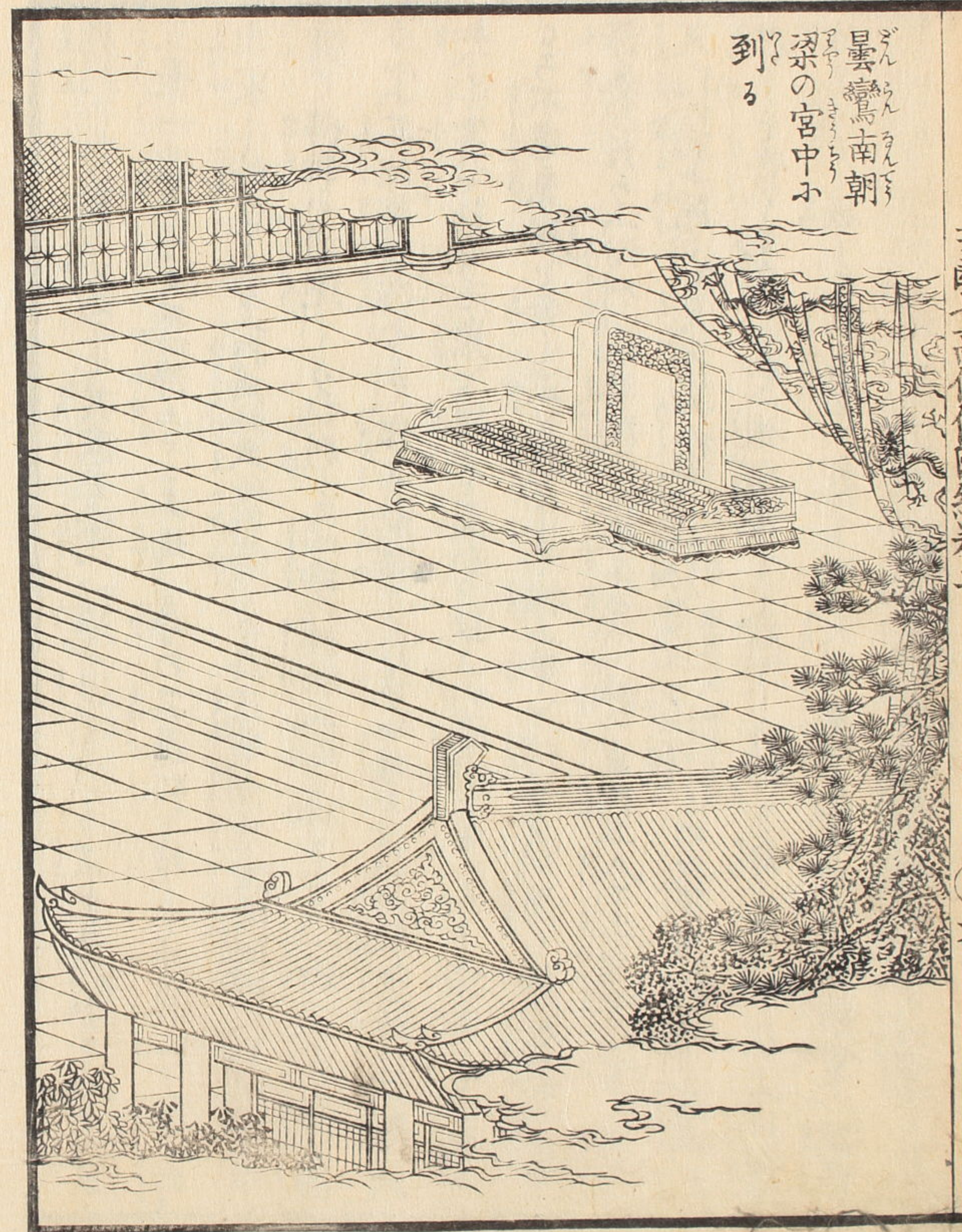
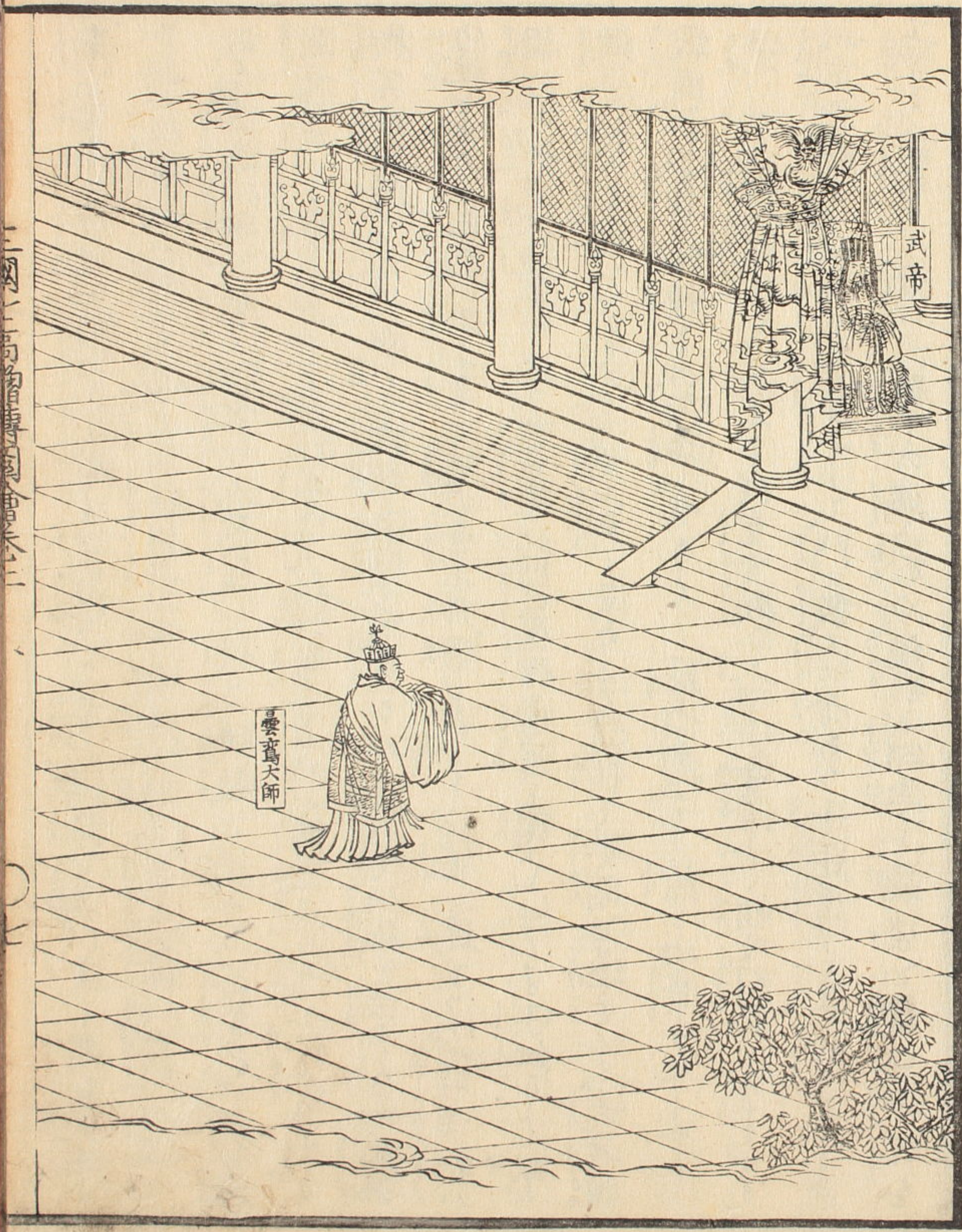
北朝として各都と建て天子と号し互に天下と争ひて戦ひやすむ。是れ曇鸞が北朝
後魏の人にして第六の主孝文帝の兼明元年丙辰に生れて東魏の孝靜帝後魏十二代
東魏西魏の興和四年壬戌に滅し夫より八年過て北齊にたり又高齊も云曇鸞
の在世南朝として宋齊梁の三代と経るなり尚吳説ありて略と又四論宗と
三論宗の二あり中論百論十二門論の三論と依る所ともあり三論宗といひ又
智度論と加へて四論宗といふ也則中論八卷ハ龍樹菩薩の作る處の論也百論二
卷ハ提婆菩薩の作る處の論也此提婆ハ付法藏二十四祖の時ハ才十五祖に
して迦那提婆大士と稱し姓ハ毘舍羅南天竺國の人なり龍樹菩薩ハ謁し
て付法あり也十二門論二卷ハ龍樹菩薩の編り論なり大智度論百卷ハ
亦龍樹菩薩の作る處の論也曇鸞此四論よりして佛性常住の義とら
らる常小四論と講し給ひしなり

前小出と續高僧傳小なる如く釋の曇鸞ハ其姓氏詳るべ震旦山西大同府

三

鴈門とて處の人なり其家五臺山に迫り邊あり未志学十五歲より内小
五臺山に登りて文珠の浄きる灵場と尋ね其遺跡と拜し菩薩心と起し即
出家し修学し内典外典の経籍とあれ道書儒書天文地理と始めし
廣く佛教に通達し別して四論の佛性心と研きなり一時大集經と讀
み其詞義深密にして容易閑悟が事と恨み此經と詳し注釋し
加へて書とけりて衆と導んを思ひて其文言と著しなす事半と過る
ころ不慮氣疾と突し止と得て推し筆と停り周く醫療と加へ尚も
保養のなり汾州山西秦陵の故墟に至り城の東門に入て上青霄と望み忽ち
天門の洞を開くと見ゆ六欲天四天王天 忉利天 須臾摩天 兜率陀天 樂變化天 他化自在天の次第階位上下重複歴
然として齊く見ゆこれ小依病頗小平愈や即ち前書に注釋
作し徒んと欲して熟思りたまふや夫釋尊四十九年三百六十餘會の説法
甚いて廣多なり其上菩薩の論人師の釋誡学之經論釋多し又此身のくるは

其以て廣多なり其上菩薩の論人師の釋誡学之經論釋多し又此身のくるは



曇鸞南朝
梁の宮中
に到る

三國七高僧傳國筆卷二

事と思ふ。呼ハ吸と待びて死する世の風有り。普く經論と學び盡し解教成就ふ
 さんと短命を及ひばし。本草の諸經具正治の法と明と長年の神仙世間往々
 あり。所詮仙術と習く長命不死の法と得る。佛教と崇めて志氣の注解と満
 足せば是又善くも思ひ立たし。江南より地子陶隱居と号る仙人ありて方
 術其妙と得て海内普く崇敬と故小曇鸞とれ。後ひて仙術と學ぶんと北魏
 の地と出く南朝の都に至ると時の帝小拜謁し奉りて。經由と達する。此時南朝ハ
 梁の武帝の大通年中有り。所司等北國の虜僧曇鸞と聞く。つら子細ありて我
 疑ひて種々查照とるも。更も吳る支ありて。頓て萎聞と遂る。是ハ所謂
 戰國とて。若や他邦より。問者や。やめんと疑ふ。然るも帝きりり
 是ハ必も國と現る。ふあ。重雲殿小入べと宣ふ。頓て引路とる。りり
 此重雲殿とて。其稱許多す。門の數又廿余あり。千送道とて甚紛ら。ま
 方より誘ひ。帝ハ先殿中の隅に於く繩牀小卻坐し。袈裟と覆ひ。帔帽を

被る。曇鸞宮殿の前小至ると後と顧みたまふ。兼對者さ。小見へ。傍と見た
 ず。高坐と稱して。上はれと飾りたるあり。外に坐る。曇鸞進んで。これ小昇りて
 佛性の義とある。と三度帝命して宣く。大檀越佛性の義深略あり。疑ありと
 と。帝さ。帽子とて便を。問たり。曇鸞志づく。答たり。問答小
 稍時つる。程小帝の。今日既小暮。小及べ。明日猶相見ありと。
 曇鸞密即ち坐と下。さ。禮とあり。徐と出り。時小廿余の門一々。妙も
 誤り。出た。帝とんと。敵覽ありて。大に嘆訝して宣く。此千送道ハ年
 久く殿中侍り。常小往還小迷。彼法師始と來りて。更不
 迷事。正しく凡人より有べ。頻と小感心。た。明旦小より。い
 大極殿小迎へ。帝禮接と辱く。由て來ると。問の。曇鸞答
 ての。野僧佛法と學ぶ。と欲と。小年齢の短と。悲し。故。遠々と。北國小
 來り。陶隱居小後。仙術と求んと。致と。帝の。此仙世と友と

せざる隱遁者ありて。近頃教同くも未らむ。心小住せり。方々佳と尊師先
 書簡と以て機嫌と尋ね而て至る。曇鸞の命小隨ひ。書と
 以て尋ねり。陶隱乃ち答曰。去月耳聞音聲。茲辰眼受文字。將由頂
 禮歲積。故使應真。未儀正雨。と。さる程小曇鸞の。とらり。彼山所至
 給ふ。陶隱居の。と請入。大。欣然。便仙經十卷。と以て。遠く。未の
 意。小酬。曇鸞。と授。夫。より。還路。小。浙江。に。つ。此。小。鮑。即。子。神。と。者。有。
 彼。浙江。浪。と。涌。と。七日。曇鸞。その。大。濤。の。初。小。値。り。て。渡。と。と。得。と。故。
 曇鸞。彼。神。廟。小。往。信。と。して。祈。告。た。ま。り。若。祈。の。こ。と。せ。ま。ふ。
 廟。と。再。宮。と。て。礼。謝。と。す。須。臾。江。神。忽。形。を。現。と。其。容貌。二十。計。
 々。曇鸞。子。迫。づ。告。と。貴。僧。と。渡。と。と。欲。を。明朝。と。待。り。必。
 徳。と。下。是。小。因。曇鸞。の。翌。朝。至。り。て。見。り。小。濤。猶。烈。と。也。怙。然。
 と。て。安。静。を。頻。々。舩。小。乗。り。て。容易。と。り。南。朝。の。都。小。還。り。武帝。小。達。し。

三

て具小由縁と奏給武帝。感す。勅。江神の為。更。小。靈。廟。と。建。營。り。ふ。
 斯。曇鸞。帝。小。暇。と。い。南。朝。と。多。本。國。小。飯。北。魏。の。境。小。至。り。陶。隱。居。
 が。教。の。ご。名山。小。入。り。修行。仙術。と。得。と。欲。と。ふ。洛。外。と。巡。り。此。彼。を。
 勝。地。と。と。折。と。不。圖。道。と。北。天。竺。の。乾。陀。會。國。を。三。藏。菩。提。雷。支。小。
 値。り。曇鸞。携。な。仙。經。十。卷。と。出。り。目。より。高。く。指。挙。て。此。是。長。生。不。死。
 の。仙。經。と。り。佛。法。の中。小。於。て。長。生。不。死。の。法。り。て。此。土。の。仙。術。小。勝。り。の。有。や。
 と。尋。り。此。時。留。支。三。藏。心。小。思。い。り。長。生。不。死。の。仙。術。を。習。ひ。修。り。て。八。苦。
 充滿。の。世界。小。久。く。存。り。色。相。輪。廻。の。苦。と。受。り。更。小。出。離。生。死。頭。證。
 菩。提。の。仙。經。小。然。る。曇鸞。色。相。相。續。の。仙。經。と。至。極。の。中。に。尊。り。ハ。
 儲。と。淺。ま。り。人。哉。あ。織。人。と。見。り。あ。拈。詞。と。聞。り。大。地。小。陸。
 と。呼。懐。り。觀。無。量。壽。經。と。出。り。是。此。西。天。の。大。仙。演。説。の。長。生。不。
 死。の。法。り。之。小。依。て。修行。と。ん。命。小。限。り。無。量。壽。佛。と。ま。り。繼。仙。術。と。

學まなび長生ちやうせいの法はふを得えたりとも少時しやうじの間ま死しむべしと終つひに死しして三有さんゆうに轉ま廻まるるの事こと。呵あ愚ぐ多たし。此この心こころを翻ひて我われ教しよふを以もつて當あたふ生死しんじと解げ脱だつする事ことを得えらるべし。と念佛ねんぶつの功德くふとくと云いふ。諸しよの如ごとく。曇鸞どんらん實じつを領りやう解げし。念佛ねんぶつ往生わうじやうの深ふか意いと授またり。直ちやく小陶せうたう隱居いんきよより授またり。仙經せんきやう十卷じゆくわんと云いふ。燒やして。それより四論しりゆんの講かう説せつに永ながく止と念佛ねんぶつ三昧さんまいの身みとなりたまひ。讚さん阿彌あみ陀佛だふつの偈げと造つくりて。安養あんやう淨土じやうとの依え止し二報にばうの功德くふとくと頭あり。天親てんしん菩薩ぼさつの往生わうじやう論ろんに注ちゆ解げと云いふ。實じつに此こ仙經せんきやう多くの辛苦しんくと云いふ。末まるし。听きするより時とき乱らん世せいふして敵國てきこくへの往ま来らい自由じゆうあり。さる。種しゆ々た小心せうしんと云いふ。遠とほくは江南かんとんに赴き。懸望けんぼうし得える。仙方せんぱうと流支りゆしの一言いちごんの示教しじやうに依より。忽たちち先非せんひと悔くわいして燒やして。多た年ねん習じゆ學がくし。聖道せいだう万行まんかうと云いふ。捨他せた力りきの大道だうだうふ飯はん。一向いかう專修せんしゆの真門しんもんに入いり。宿善しゆくぜん至來しじゆらいと云いふ。此こ即すなは曇鸞どんらんの改悔かいけ回心かいしん一念いっぺん發起きつじの時節ときせつ平生へいぜい往生わうじやうの現げんれと言いふ。

善提ぜんだい流支りゆし三藏さんざう。北天竺きたんてく乾陀かんと會國けいこくの人ひとなり。元魏げんぎの南臺なんたい洛下らくげ永寧えいねい寺じに住ぢひ

四

著ある。听きの經きやう三十九部さんじゆうぶ。百二十七卷ひやくにじちやくせん淨土じやうと傳でん来らい相承さうじやうの宗祖しゆしゆなり。天親てんしん菩薩ぼさつの後のち此こ三藏さんざうふ飯はんと云いふ。二藏にざう義ぎふ見みえり。按あじり。流支りゆし三藏さんざう曇鸞どんらん大師だいしに授またり。听きの淨教じやうきやう。南山なんざん觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうと云いふ。又また雲棲うんせい阿彌陀經あみだきやうの説せつふ。阿彌陀經あみだきやうと云いふ。近世きんせいの日溪にちせき江州かうしゆ正せい大無量壽經だいむりやうじゆきやうと云いふ。蓮如れんしよ上人じやうじんの正信せいしん偈げ大意だいいふ。南山なんざんの説せつふ。觀無量壽經くわんむりやうじゆきやうと云いふ。然しかる。三論さんろんの系譜けいふに。流支りゆし天親てんしんの淨土じやうと論ろんと授またり。淨土じやうと論ろんの流支りゆしの將来しやうらいより自みづかれと譯やくふ。而しかも此こ論ろんと曇鸞どんらん師しに授またり。故ゆに曇鸞どんらん此こ論ろんに注ちゆ解げと著ある。後のち人ひと尚考じやうかうべし。魏ぎの帝王ていおう曇鸞どんらん大師だいしと崇あがめて神鸞しんらんと号なづけり。勅ちやくと下くだり。并へい初しよの大巖だいいん寺じに住ぢひ。尔しか後のち汾州ふんしゆ北山へいざん石壁せきへきの玄忠げんしゆ寺じに移うつ住ぢひ。又また介山けいざんの陰いんに往ゆく。徒たを聚ありて淨業じやうごふと蒸むじ。今いま鸞公らんこう巖いんと云いふ。是これ。魏ぎの興和きやうわ四年しやうねんに卒すす。春はる秋あき六十むそ有あり。臨終りんしゆうの日ひに至いたりて虚空こくうより花降けがらる。幡天ばんてん蓋がい亦また寺じの宇うと覆おほひ。香かう氣き

四面小薰。音樂の聲を。寺に登る許多の衆人。これを見聞。事の由。帝に奏聞。勅して汾西秦陵の文谷に葬。靈廟を營建。並に石碑と建て師の高徳を録し給ふ。今尚存在と云々。已上續高僧傳の大意。淨土論下云。沙門曇鸞法師。并州汶水の人。魏の末高齊の初猶在。神智高遠。三國の人皆その徳を知る。衆の經卷。小詳を。人外に獨歩。梁國の天子蕭王恒。北に向て曇鸞菩薩と禮し。天親菩薩の淨土論を注。解し。裁く。兩卷。又無量壽經奉讚七言の偈百九十五行。并小問答一卷。と撰集。世に流行。道俗と進りて決定。往生諸佛と見奉る。得。常に龍樹菩薩。小臨終の開悟と請ふ。誠に所願の如く。一夜聖僧の像と現。心未だて菴室に入。杖は龍樹の便ち説く。曰く。已に落る葉の枝に附べ。未だ東の粟の倉の中。未だ追ぐ。白駒隙と過ぐ。暫くも留む。已に去るの。未だ追ぐ。現。

在。今何うあ。白駒廻る。事難し。法師妙言。旨に達。是終りと告る。かりと知る。これ依。即ち夜中に諸方白衣の弟子及び寺内出家の弟子。小告く。今既命終。と。三百余人一時小雲の。曇鸞沐浴して。新に淨衣を着。手小香爐と。西に向て坐。門徒小教誡。西方の業と。索じ日の初出。時大衆聲と。彌陀佛と念。便即壽終。な。寺の西五里の外。小比丘尼寺あり。並に是門徒。早朝小堂。小集。粥と食。時空中。微妙の音樂。聞へ。西より來て。東小去ると見る。其所。集る衆人。皆これと奇異。中。小智者ありて。大衆小告て云。法師。和上。生人。小教。淨土の業と修。今此音樂。東小向て去。ものは。是法師と迎ひ。來。と。食訖。頭。法師の所。訪。既。寺と出。時。又音樂。空中。ありて。東より西小向て去。閑尼僧。等相與。彼不至。師と訪。果して入滅あり。と見ると云々。

どん さん だい
曇鸞大師
あつち しょぶつ
入滅諸佛
きんぎょ
来迎の圖



五

淨土往生傳上云。夏一夕。鸞正持誦。見一梵僧。披帛而來。入其室。曰。吾龍樹也。其所居者淨土焉。以汝有淨土之心。故未見汝。鸞曰。何以教我。樹曰。已去。不可及。未來未可追。現在今何在。白駒難與迴。言訖而失。鸞以所見勝異。必知死生之期。戒美。即集弟子數百人。盛陳教誡。言其四生。役々其止。無日。地獄諸苦。不可以不懼。九品淨業。不可以不修。因令弟子齊聲高唱。阿彌陀佛。鸞乃向西。冥目頓顙。而示滅。是時。道俗同聞。管絃絲竹之聲。由西而來。由西而隱。魏主曰。此誠佛子之真修。其所啟也。有在矣。勅葬汾西之文谷。仍條其生平所習。以立碑焉。瑞應刪傳。新修往生傳上。龍舒淨土文五樂邦文類三。佛祖統紀。三八。蓮宗審鑑。四歸元直指集上。諸上善人。詠往生集。一等不出。皆大同。

安樂集の下。曰。曇鸞法師康存の日。常。淨土と修。亦。每。世俗の君。あ。ま。て。法師。不。呵。く。問。て。曰。十方佛國皆淨土。と。法師。獨。意。と。西。注。ひ。豈。

偏見。淨土。生。ど。く。非。ど。や。法師。對。て。云。吾。ハ。既。不。凡。夫。智。惠。淺。短。と。未。地。位。不。入。と。念。力。均。く。と。ん。ん。哉。草。と。置。て。牛。と。引。恒。不。心。と。槽。櫪。不。繫。へ。ま。が。如。し。縱。放。全。く。所。取。る。ま。と。と。得。ん。や。と。復。難。者。紛。紜。と。も。も。法師。獨。決。以。是。と。以。て。一。切。道。俗。と。問。と。う。く。但。法師。と。一。面。相。遇。者。り。未。正。信。と。生。む。も。亦。勸。り。て。信。を。生。じ。ら。若。己。不。正。信。を。生。じ。者。ハ。皆。ま。り。て。淨。國。不。取。也。是。故。不。法。師。命。終。の。時。不。臨。ん。で。寺。の。傍。左。右。の。道。俗。も。旛。華。院。不。映。ら。る。を見。さ。と。く。異。香。音。樂。迎。接。し。て。往。生。と。遂。る。と。聞。と。云。曇。鸞。大。師。一。代。の。化。度。の。風。ハ。先。第。一。天。親。菩。薩。の。往。生。淨。土。論。ハ。文。句。甚。く。簡。畧。不。く。愚。昧。の。そ。れ。ハ。取。惑。不。所。多。き。故。其。論。ハ。注。釋。を。加。へ。往。生。論。注。と。し。る。上。下。二。卷。の。書。と。作。り。し。自。力。他。力。の。深。義。廣。大。無。尋。の。一。心。の。所。由。を。示。し。し。此。論。注。の。注。の。字。ハ。濯。と。し。文。字。を。水。と。し。掛。れ。物。と。し。と。顯。く。如。く。淨。土。論。の。中。に。教。化。した。ま。り。天。親。論。主。の。思。召。の。腸。と。探。り。出。て。示。

給とて意を。又解とて前ふを。此解の字は文字ありて
 りつとて糸とて見せし意なり。文字の作りは角扁牛牛後刀小從
 文字ありて唐書小おいて牛の料理は時。下手多とて思ふ。思ふは切ら
 のとて時と移して手際あり。尤是は其料理の仕方ありて
 骨のつひ切れと覺し。早く骨と肉と能分して其手際よくし
 唐土庖丁とて此料理小妙と得たる者あり。故小牛と解刀と庖丁と
 たり。莊子曰庖丁文惠君の爲小牛と解て曰。臣刀十九年。解とて數千牛
 して刀の又新小研とて如とて。されば數多の牛と料理せし刀の又の損
 ともあらざり。其牛と解りて轉て未とて何支とて物のつり
 手際よく筋道のまこと。此解の字は用也。又淮南子も屠牛一朝の解は
 吐く九牛而刀りて毛判とて。料理の上手とて。夫より憂と解或は
 思と解とて遺とて。さりとてる糸の如くつと解とて判也。講

也説也釋也と字注り。今も淨土論の自力他力の道理。往相還相の二
 回向の謂一心皈命の安心と明小変判し講釋し。曇鸞大師の注釋の解
 小あさん天親菩薩の論判の愚とてのふの義理分明とて也
 再説曇鸞大師の釋尊入滅の後一千四百二十五年。後魏の孝文帝の義明
 元年丙辰小誕生し。東魏の孝靜帝興和四年壬戌小春秋六十七歳
 入滅し。即日本人皇三十代欽明天皇の三年あり。三信三不信
 曇鸞大師往生論の註をつて論の不如實修行相應を釋して。三信三不信
 相對の釈を設けり。此釈の原論の一心皈命の一心を釈とて起して。三信
 他力の一心の細釋して他力の信心なり。三不信は自力の信心の相
 論小稱名憶念とて無明由在く所願と満せざる者あり。不如實修
 行相應とて小由るを。不如實修行とて自力雜善の修行を。如
 實修行は他力信心の行とて也。故注小不如實修行と釋して三種の不相應

一、信心淳くば若存若亡も故也。二、信心一くば決定も故也。三、信心相續
せん。餘念間が故も又第一の信心の弱く信心堅固らば。或煩悩重く罪
障の強き身と卑下し。又信の甲斐なく行の怠あけく。本願と危く若善心も起り
妄念ももた念佛のつゆに時往生もと思ふ斯のごく或は往生も下り
思ひ或は往生も思ふ故も又これ無き思ひ有故も若存若亡
第二の不信の自力難善の執情やがく他力往生の正念落つべ。故に慥に往生
決定と思ひ定む心もなかり。第三の不信の或は難善とましく或は助業を勵む或善
本起行の念やまひ斯のごく余念難く也。不信心相續せざる此三不信の自力の信
た。これ六部の自力根性と振る。一向心小称名念佛して。佛恩を喜ぶる
三信とも他力の信とも一心皈命とも。故に注し三不信を釈し已く此と
相違もと如實修行相應と名く。是故に論主建お我一心と言ふと言へり
是れ論主の一心と言ふ他力の信心也と云

○道綽禪師傳

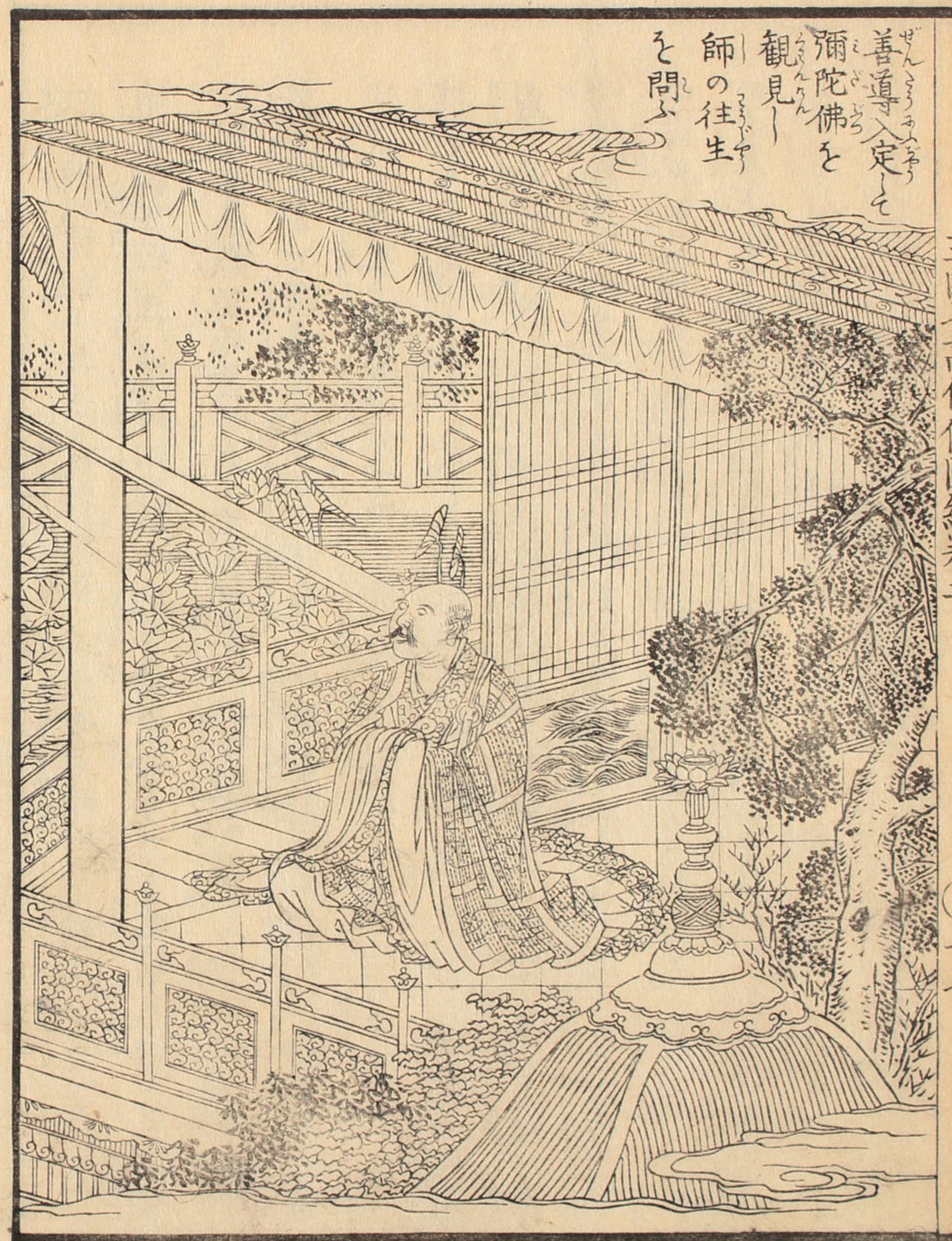
道綽禪師の傳は續高僧傳第二十四篇習禪の瑞應剛傳新修往生傳中。佛祖統
紀三十八諸上善人詠往生集一等不出り大同小異あり。茲に續高僧傳の大
意を以て著しとる。抑禪師ハ釋尊滅後一千五百十一年に唐の并州の晋陽
汶水懸子生れなり。則後周北の武皇帝の保定二年壬午と云
按ずる小此年後周滅して。後梁の明帝天保元年なり。南朝の陳の文帝
天嘉二年に當る。蓋後周の代も生じて。化と唐朝も盛ると。故に唐の

道綽禪師と云なり

道綽姓ハ衛氏弱齡と俗間も在り閭里もあつてと恭讓と以てと云て
人と敬して侮らば少長も小其礼節と專ら寸人ふ是と称義せり。十
四歳にて出家し。廣く諸教もよく。殊に大涅槃部と宗として弘傳し
給ひ。講も二十四遍涅槃宗の日本小將末其大概と天台宗も此を彼宗も
五時八教と立る。法華涅槃同醍醐味も一時と云と云

取らばと同唱どうしょう々々毎まい小便せうべん一粒いちりゅうを置おき。斯このの如ごとくして數かず百萬ひゃくまん斛こくと積たみ入り是これも
 事ことによせて慮りを攝とり縁えんと静しずんと為なす。道俗どうじやくも凡たゞ風かぜを慕あひこれと修しゆする者もの
 多おほし又また道綽だうてつ自ら常とこに木き樂がく子こと珠たま數かずして諸しよの四し衆しゆ小せう遺いす其その称な名な念ねん佛ぶつと
 教きやうへおびく禎てん瑞ずいと呈ていす具ぐ小せう行ぎやう圖とを叙しよる。淨土じやうと論ろん兩りやう卷くわんと著しよす遠とほく龍りゆう樹じゆ天てん
 親おやの法はふ門もんと説とく。近ちかく曇とん密みつ惠ゑ遠えんの心こころをのべ大おほ小せう淨じやう土とと尊そん宗しゆし明めい昌ちやう
 言ことと示しす。文ぶん旨し要やうと該がい諸しよの化け範はんと詳しやうす。是これれ化け導だうと蒙もうすの年としとかまなく
 益えきさんさんなり。道綽だうてつ淨土じやうとと宗しゆとくなり。坐ざすらふ常とこ小せう西さい小せう向かうひ晨ちん宵しやう假がすも西
 と後のち小せう小せう六む時じ篤とく行ぎやう敬けい行ぎやうとらなり行ぎやうと缺けつきば行ぎやう住じゆ坐ざ卧おふ念ねん佛ぶつ止しすら日にち
 小せう七しち万まんとらく限げんも。沙門さもん道だう撫ふとら名な勝しやうの僧そう京きやう師しより来きりて玄げん忠ちゆう寺じに
 了りやう了りやう道だう綽てつ小せう謂ゐして淨土じやうとの行ぎやう業ぎやうと同どうなり共とも淨じやう教きやうと弘くわう通つうなり。道綽だうてつ今こん年ねん
 八十四はつじゆ小せうとら神しん氣き明めい爽すわうなり傳でんの大意たいぎ也
 道綽だうてつ禪ぜん師しハ西河さいがとら所ところ小せう生せいとらり。晋陽しんやう文ぶん水すい縣けんの石壁谷せきへきこ玄げん忠ちゆう寺じ小せう任にんの

故ゆへ小せう西河さいが禪ぜん師しと号ごうす。又また後のち玄げん忠ちゆうと号ごうす。玄げん忠ちゆう寺じハ曇とん密みつ大師だいしの建けん立りつとらす
 淨土じやうと論ろん下げ曰いふ。沙門さもん道だう綽てつ法師はふしハ并なら州しゆ晋陽しんやうの人ひとなり。乃すなはち是これ前まへ高かう德とく大だい密みつ法師はふし。
 三世さんせい已い下げの懸けん孫そんの弟てい子こなり。温ぬん槃はん經ぎやう一いつ部ぶと講かうす。常とこ小せう曇とん密みつ法師はふしの智ち德とくの
 高かう遠えんなりと讚さん嘆たんす。自ら云いふ相あひま去さすと千里せんり懸けん殊しゆと尚なほ講かう説せつと捨すてて淨土じやうとと修しゆ
 已い小せう往わう生せいとら見る。况いはや我われ小せう子この知ちとら解げするら何なんぞ多おほくらて此これと捨すて
 德とくとら不足ふそくと。大業たいぎやう五ご年ねんより已い来きた即すなはち講かう説せつと捨すてて淨土じやうとの行ぎやうと修しゆす。一向いこう小
 専せんら阿あ弥み陀た佛ぶつと念ねんす。禮らい拜はい供くわう養やう相あひま續じよして間あひだをらし。貞てい觀くわん已い来きた有あ縁えんと閑
 悟ごせん為なす。時とき々々魚ぎよ量りやう壽じゆ觀くわん經ぎやう一いつ卷くわんと敷ふ演えんして。并なら土との晋陽しんやう。大原だいげん。汾水ぶんすい。三縣さんけん
 の道俗どうじやくと示し誨ゑす。七しち歳さい已い上じやうなり。小せう彌み陀た佛ぶつと念ねんすらと解げす。上じやう精しやう進じんする者もの
 ハ小豆せうまめとらて數かずして彌み陀た佛ぶつと念ねんす八十はちじゆ斛こくあり。九く十じゆ斛こくを得とく。中ちゆう精しやう進じん
 する者ものハ五十ごじゆ斛こくと念ねんす。下げ精しやう進じんのものハ二十にじゆ斛こくと念ねんす。諸しよの有あ縁えん小せう教きやうと
 西方さいほう小せう向かうく淨じやう唾た便べん利りせん。西方さいほう小せう背せいて坐ざ卧おすらしむ。安樂あんらく集じゆ兩りやう卷くわんと撰せんて



善導入定を
彌陀佛を
觀見し
師の往生
を問ふ

三國七高僧傳圖繪卷二

廿七

世不行也。貞觀十九年歲次己巳四月二十二日。悉く道俗と別を告ぐ。
 三縣の内の門徒別ふ就て前後断と。數と記とを難し。廿七日に至て
 玄忠寺におひて壽終ひ。乃ち白雲西方より來るあり。變じて三道の白
 光とる。自房の中に於て徹照通過と終訖る。乃ち滅後墳陵と燒時復
 五色の光三道空中現じて日輪小映し遠る。乃ち訖る乃ち止む。復紫雲
 三度墳の上にお於て現どもあり。遺從の弟子同此瑞と見ると云。又浄土往生
 傳に依ふ前高僧傳に見えざる道撫法師ハ久く玄忠寺に有てその後
 寺と去る時。道綽禪師と互ふ離別の情を以浄土の再會を期して他國少赴
 疎遠なりしが道綽の往生したまふと三日過く聞ひて曰吾常ふ
 行とて道綽先主と思し何乃ち後や吾一息の功と加くと見佛の
 期を追ふと。即時彌陀の尊像の前より頭を叩き發露懺悔し
 退きて往生の座にお就く。忽ち終ると瑞應剛傳新修往生傳佛祖統記

諸上善人詠等の傳に大よむ

又善導和尚とて道綽の御弟子也。晋陽の九品道場にて觀經を閑
 演したる時始く師弟の契約あり。即ち觀經を授与し及び浄土の法門
 と相兼しむ。あるふ善導和尚は不待時の別祝して。忽ち三昧發得し
 出定入定了了分明と云。散心の眼前も浄土の聖境と拜見し。況や
 入定の日の弥陀如來と對面し。道綽ハ師たりと云。亦三昧と發得し
 たり。是故或時善導大師と問たり。我は決定して往生と得てんや有
 り。善導大師と云。一莖の蓮華とりて佛前の乾る地お拂て七日の
 間行道念佛せん。若蓮華萎と憔悴せん。往生決定せん。あれは道綽
 禪師頻て教ふ任也。一莖の蓮華と佛前お拂て七日行道し。所
 七日の間此を果然とて萎と悴とて次第も色鮮なり。道綽大觀喜し。
 偈に我往生決定なりとて念佛し。唐高僧傳瑞應傳
 新修傳の大意

一説ふこれ不審あり往生の障ハ疑心より甚し。夫道綽禪師ハ三
 信三不信と慙不釋して。他力の信と人ハ勸めたる然不往生と得へる得ま
 じやと尋ふハ疑心なり。善本修習若存若亡と。疑佛智とて往生の障と
 何ハ況やかのぞく大疑心ハ往生の障なりと。尤然あり但疑心ハ二
 あり。安心の疑ハ實ハ往生の障なり。起行の疑ハ往生の障なり。具如三心要集
 今道綽の疑ハ安心の疑ハ起行の疑ハ疑心あり。是疑心似く疑心あり。淨土宗要
 その故ハ信心決定の人往生ハ於て勝解作意と起るとも。未真實作意
 と得ず。茲とて聖教の道理と聞て。決定と疑つと。直ハ淨土の
 聖境と見ぞ。又佛の告と得ず。然るハ真實ハ往生と大切と思ふ
 故ハ良もこれハ加様の疑あり。往生と大切と思ふ唯人もの願心なり。此疑
 此疑ハ譬ハ貪欲の深人。他人より金銀と得る約束とて券契と
 受取と。其金銀と受取と。少と疑と生ぜども。未手と。此疑ハ

若ヤ失却とせん。用心して日夜朝暮心ふ。救く。落ても覚ても忘る
 如く。又无欲の人ハ忘れず。如く。言出と。往生と願ふ。此疑
 此疑ハ。善導ハ淨土と貪せざる。无上解脱の障と。是ハ大事の往
 生。曠劫の大慶。行住坐卧心ふ。思ふ。甚有。又日或時善導ハ告く。宣ふ。願く。師定ハ入。道綽ハ決定して往生
 と。阿彌陀佛ハ尋ふ。有れば善導大師即定ハ入。觀念し
 給ふ。御丈十丈計の阿彌陀佛出現。觀見。是ハ依て問ふ。六
 道綽ハ現ハ念佛三昧と修と決定して往生ハ得んや。又何の年月ハ
 往生と。得んと有れば。阿彌陀佛の御答ハ樹と伐。連ハ分と下。縁
 家ハ共ハ語ると。家ハ還らん。苦と時。又道綽ハ
 三の罪あり。此三の罪を懺悔せ。佛の佛像經卷と擔。下ハ安置し。
 自ハ深房の奥。深る。処ハ居。二ハ起。五塔寺等の功德と營。して

受戒の出家比丘大僧は馳使ひ策役と。三は屋宇と營造をも不忠の命と損ひ
 傷る道縛ひし此罪と犯す。くくく懺悔せし故に罪益重し。第一罪二百
 五十戒の中の衆学。第八十五の安佛下房戒と犯す罪なり。今時の行者平居
 坐卧の處に佛像と安置して褻瀆の罪を得る。在家無戒の者もくくく。
 恭敬修と欠ゆふ念佛の信者の作業ふあり。祖師の教ふ背く。況や道
 縛大僧の身と犯戒の罪なれば。十方の佛前ふ於て第一の罪と懺悔とす。
 第二の罪は具足戒の中の掘地戒の所制と犯すの罪なり。道縛ひし寺と造り
 塔と造るのふ受戒の比丘大僧と馳つて律制ふ順せと。俗士の奴婢を
 役もくく如し。諸の比丘衆道縛ふ馳つて心より犯戒をくく多し。責
 一人ふ帰るるれば皆道縛の罪なる。故に四方の僧の前まで第二の罪と
 懺悔とす。也。第三の罪も又波逸提の中の掘地戒と破るの罪なり。是又
 比丘大僧の宜かざる處なり。故に一切衆生の前ふ於て第三の罪と懺悔と

べと也。されども此三罪の具戒中の犯戒の罪なれば道縛の智行兼備る身上
 みての翹壁の瑕のごとし。今時の出家の擧足下足一語一点念の起不起三業悉く
 犯罪するがらざるを云泥の違なり。但無戒の僧の上とてのみ業罪のふして制
 罪なり。道縛の御身とて違制罪を加ふる故に及つて今時の僧より重し。係
 ちり。此三罪と懺悔せし佛勅あるとて見をば其外は罪業芥子なるも
 ちれ事あり。又曰道縛の三罪は往生の障とす。若し若しとて念佛の功德
 逆悪尚減と況や其余の罪と。若し此三罪實に往生を障へ。經論說皆古語と
 なり。罪悪凡夫の往生の望と絶とつて心得ざるやと云ふる義は附て古來より
 さるく説あり。それ中實に往生の障とらるる。ねども如来抑止門の方便なり
 とつて又ハ道縛ハ上品往生の祝なり。故に三罪障とす。若し下品の往生なれば三
 罪障とす。げども是ハ他力真宗の意ふあり。又或説ハ三罪ハ業事成
 辨の障ふして往生の障ふあり。此義甚深なり。道縛の三罪ありて往生

せりふ非也。只是三昧發得の障有り。若九夫の年世ふ業成せられも臨終不見
 佛業成くと往生せらるるも更ふ歎く所あり。又道綽の善知識の御成るれば
 作業の上も不相應の行儀あれは道俗の手本とあるもふ隨分はくして如法
 ふ勤めざるべし。若ふもこれの衆生滯度の方便ふ善あり。故ふ往生の障りも
 あらねども如来の大悲方便めて懺悔せよと云ふなり。

道綽禪師ハ曇鸞大師函授の弟子ふあり。曇鸞大師ハ梁朝の人。道綽ハ
 唐の世の人なり。年代二百余歳と隔る。然れども玄忠寺やして曇鸞大師
 師の碑文を見く淨土ふ皈し曇鸞と師して尊崇しなまふ是依用相承
 ありて直接相承ふあり。異説ハ七害の船中めて曇鸞を淨土の法門他力の
 安心と相承し。三國傳来の疑思十念と口授しりたり。高僧傳統記の
 諸傳ふ載ざる所。漢人傳もんが和人らんぞもん哉。只これ異流の末学
 牽強附會の説ふして取あたふと絶倒する可堪なりと云ふ。

○善導大師傳

善導大師ハ隋の煬帝の大業九年癸酉ふ生れ。唐の高宗の永隆二年ふ往
 生。ふまふの階の代ふ生れなり。もと。唐朝ふ於て化益盛なり。故ふ唐の
 善導和尚と号し。姓ハ朱氏ふして泗州の人なり。瑞應傳。或ハ臨淄の人也。新修傳
 と云り。初くして密州の明勝法師ふあがて出家し。常ふ法華維摩の
 二經を誦したまふ。明勝法師ハ三論宗めて。法朗大師の門人の嘉祥大師と
 同室の学者なり。一時西方淨土の變相。曼陀羅と見て嘆く。日。何ふして
 質と蓮臺ふ託し。神を淨土ふ接しむべしと。欣求淨土の心を發し給ふ。

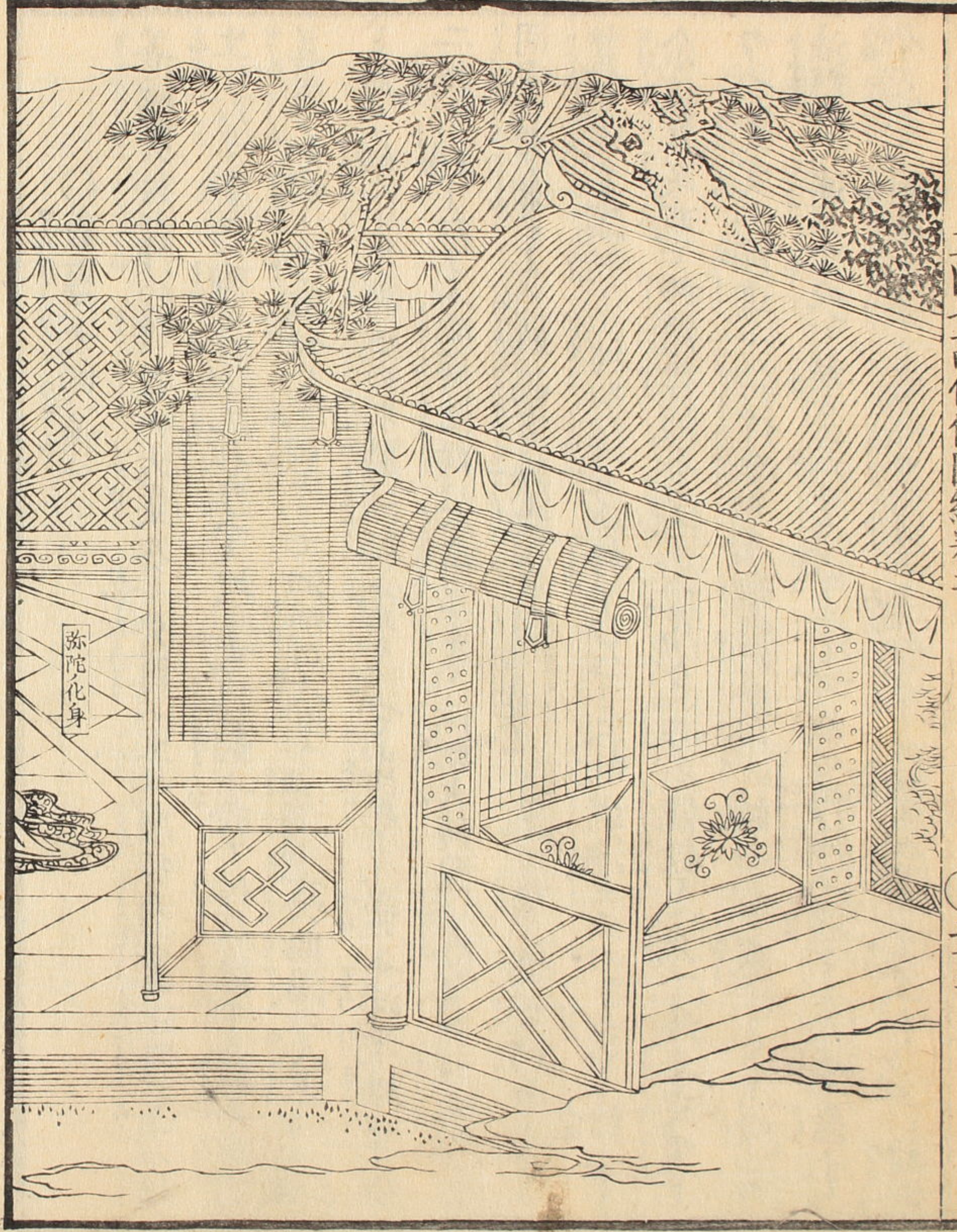
尔後具足戒と妙開律師ふ受ふ及んで。共ふ觀經を見て悲喜交嘆ト
 云ふ。是実ふ佛道ふ入の津要なり。余の行業ハ迂僻ふして成どく。唯ふ
 法門の速ふ生死と超るの法なり。今まで可様の佛法ふ逢ふることと悲し。

今と云ふ宿善到來して。他力の法ふ逢ふこととの嬉しむ。大ふよろこひ給ふ。



善導觀經
 注一四帖の疏を
 著しわす毎夜
 弥陀佛来現
 指授あり

三國七高僧傳圖繪卷二



三國七高僧傳圖繪卷二

三十二

善導或時心不思惟給六九佛の教隨祝得益して祝欲不隨つて設くる
 教るれば若祝法相應せぬれば功なき。然れども吾子有縁の法を求めんと
 思ひわひ。則ち經藏の中へ入り我の有縁の法あり授けたまふと眼と一心
 手小まきせて探りて觀經と得たり。偕に有縁の經にて有ると大に喜ひわひ
 讀誦し習學し。介後道綽禪師の晋陽にて觀經と演話したまふ。我
 聞て貞觀十五年九年千里と遠くせびりて道綽の所へつたつて志と展
 乃ち道綽と觀經と授けたまふ是觀經に有縁の經なる上今も
 道綽より相承たまふ。因縁の深厚なる事とらるる。夫より觀經ありて
 三昧發得し定中お於て淨土の依正の莊嚴と拜見し。乃ち出定入定
 ころりかゝると。又東都の擇英法師花嚴經と講し。四十遍道綽禪師の
 道場へ入る。三昧お遊んで歎じて曰。自恨多年空文疏となつて。身心と勞
 もる耳何ぞ期せん念佛不可思議なり。善導曰經不誠言あり。佛豈妄

語したるんや。又善導平生常樂を食する毎に自責て曰釋迦尚乃分衛す
 善導何人ぞ。端居りて供養と素ん。乃至沙弥らび小禮を受む。彌陀經
 と寫し。十萬卷淨土の變相と書き。三百鋪見る程の塔廟修理
 と加へる。佛法東行より己未未善導の如に盛徳あり。夏瑞應刪傳
 新修往生傳中。曰唐の貞觀中道綽禪師方等懺を行ひ及び淨土九品道場
 小觀經と講るを見て。大に喜びて曰これ真に佛道へ入の要津餘の行業の
 廻り遠く成難。唯觀門速小生死と超るの捷徑。吾れと得ると。
 是に於て篤く勤精して頭然と救ふ如く。續て京師へ至て四部の身
 子と驚り。勸めて貴賤を隔む。彼屠沽の輩へ至るまで。普く開悟を。
 又堂へ入て合掌し。跪きて一心念佛して力の竭るふ非れ。休む。寒
 冷も汗と流し。此行狀を以て至誠と表を出て。則ち人の為し淨土の法と説て。
 りろくの道俗と化して道心と起さ。淨土の行と修せし。ちりりも利益

せむしとあり三十余年寝處と設とて赤くも睡眠せん。洗浴と除き。曾て衣と脱ど。般舟行道禮佛方等と以て身の勤と守。戒品と護持とて。毫末も犯さば。目と奉て女人と見と一切の名利心不念と起らば。假も。綺詞。戲笑。往処争て供養と申。飲食衣服の四事。豊れも皆自然に。他は施。好食あれ。大厨子送て徒不供養。其身唯麤食とく。僅よ身体と類いて足とく。乳酪醍醐のみ飲。將て料紙とて阿弥陀經と寫とて。十万余卷。画とて。曼陀羅三百餘。又破壞せ。伽藍。燈とて。明とて。歲常。三衣瓶鉢と人持。營造。尤姑終改。又諸の有縁と化度とて常。自ら。行。大衆と共歩行。人と連立。世間の語。修。坊有。其暫。礼謁と申。法と説と聞。あ。道場。

預て親。教訓と承け。或曾て見聞。其教義と披き。尋りて。浄土門。或展轉。浄土の法門と授。共修。京師。諸州の僧尼男女。或身と高き岸。投。命と捨。又深き淵。命とす。或高き樹の枝。隨。或身と焚て。供養。畧四方。小聞。者百餘人。又妻子と捨て。阿弥陀經と誦。十。二十。三十。遍。者。又阿弥陀經と念。日。一。五。十。一。十。遍。者。念佛三昧と得。浄土。小往生。の數と知る。或善導。問て。日。念佛。安。往生と得。る。や。答。日。汝。念。所。の。汝。願。所。と。遂。對。已。善導。自ら。阿弥陀佛と念。斯の如。一聲。則。一道の光明。其口。出。十。聲。百。聲。光明。又。此。善導。人。謂て。日。此。身。厭。諸。苦。逼迫。情。偽。變。易。暫。も。休息。乃。住。所。の。寺。の前。る。柳。の。樹。子。登。西。小。向。願て。日。願。佛。威。神。顯。我。と。接。觀。音。

勢至亦未と我と助け。我この心正念と失ふと驚怖と起す。弥陀の法中に於て以て退墮と生ぜざるを願ふ。願畢其樹上より身を投じて自ら絶ふ。時小京師の士大夫誠と傾け。帰信して咸其骨と収め。以て葬る。高宗皇帝其念佛の口より光明出く。又捨報のとき精至かくの如くと知す。寺額と賜て光明寺と号とす。浄土往生傳中。浄土宝珠集四。浄土文五。衆邦文類三。蓮宗密鑑四。佛祖統紀二十七。浄土指歸集下。諸上善人詠往生集一。等々。善導大師の傳と載て。全く上は奉る。新修浄土往生傳と同じとす。

諸此善導大師の前も言る如く。幼少より密州の明勝法師に從ひ出家。唯ひ法華經維摩經と修學し。唯ひ自ら思ふ佛經の教門君子。小く道一途ある若其機小契とんば。勞く功あり。夫れ經藏に入らざる。目と閑手ありて。これと探す。我有縁の經をこそせん。

念と浄土の觀無量壽經と探り得る。大に喜び觀經の十六觀法は恒に思惟して唯西方小心を注ぐ。終南の悟真寺小迹とて。後道綽禪師小見えて專念佛一行と自行化他す。六十九歳に寂と示す。此の程小善導大師の御師。道綽禪師より。私願他力の真面目と授け。御自身の往生の決得し。唯ひ觀無量壽經とて十六の觀法を説たる。唯ひ浄土を名高き天台大師の始とて。浄影大師嘉祥大師とて。高僧方より自力の眼より觀經と見損ひ。自力修觀の經と見ゆ。故とて。世の愚痴なる衆生自力迷ひ。折角小弥陀超世の本願不値か。たは飯糶と枕して餓死とす。小齋とて。空しく生死を流轉せんと。憐れむ。諸佛の證據と乞願す。唯ひ觀經の四帖の疏と作る。古今と指定とす。大言と吐く。末代濁世の衆生往生の道迷ふ。御一代の製作の觀無量壽經疏四卷。法華讚二卷。往生禮讚一卷。觀念法門一卷。般若

一巻。臨終正念訣一卷。勸化徑路修行頌一首等。現世は行きて就中觀
經四帖の疏。第四卷の尾。自ら感ず。靈相と記して曰。故一切有縁の
知識等。小白。余は既。生先の凡夫。智慧淺短。然る。佛教幽微。一
敢て。輒異解と生ぜ。遂に即心と標。願と結んで。靈驗と請求。方
心と造る。盡虚空遍法界。一切の三喜。釋迦牟尼佛。阿彌陀佛。觀音。勢
至。彼土の諸の菩薩。大海衆。及一切莊嚴相等。南無。壽命。其今
此觀經の要義と出して。古今と指定せん。欲と。若三世の諸佛。釋迦佛。阿彌
陀佛等の。大悲の願意。小結。願。夢中に於て。上願。所の如く。一切の
境。見ると。得んと。佛像の前。於て。願と結び。早うて。日別。阿彌陀經
と誦。三遍。念佛。三万遍。至心。發願。即當夜。於て。西方の空
中。見る。上の如き。諸相。境。悉く。顯現。雜色の。崑崙山。百重。千重。種
種の。光明。下地と照。地。金色の。中。諸佛。菩薩。あり。或ハ坐。或ハ

立。或ハ語。或ハ黙。或ハ身。手と動。或ハ住。て動。者あり。既。此相と
見て。合掌。して。立て。良久。覺。覺已て。欣喜。勝。次。觀經の。義。門
と認む。是より。已後。毎夜。夢中。小常。一僧。ありて。來て。玄義の。科文。と。指授。を
而して。更。又。見。び。後。時。下。書。と。復。更。小。至。心。小。七日。と。期。して。日。別。阿
彌陀經。と。誦。十。遍。念佛。三。万。遍。初。夜。後。夜。小。彼。佛。の。國。土。の。莊。嚴。等。の
相。と。觀。想。して。誠。心。小。經。法。の。如。く。當。夜。即。ち。三。具。の。磴。輪。道。の。邊。獨。轉。と。り。と
見る。忽。ち。人。白。駱。駝。小。乘。來。り。て。前。へ。勸。め。ら。り。師。當。小。努。力。て。決。定。往。生。と
退。轉。と。り。此。界。ハ。穢。惡。と。苦。多。貧。樂。と。生。ぜ。れ。と。答。て。言。大。お
賢。者。の。好。心。の。視。誨。と。蒙。る。某。命。の。畢。と。期。して。敢。て。懈。慢。の。心。と。生。ぜ。れ。と。云。
第二の夜。阿彌陀佛。身。眞。金。色。あり。七。寶。樹。の。下。の。金。蓮。華。の。上。在。り。て。坐。し
ゆ。い。十。僧。圍。繞。と。亦。各。坐。と。佛。樹。の。上。小。天。衣。を。繞。る。と。見。る。面。と。正。し。西。小
向。て。合。掌。し。坐。して。觀。奉。る。第三夜。兩。の。幢。打。極。く。大。小。高。く。して。幢。ハ。五



酒の正念を乱すものなれば
 小乗の教小の草の葉すべし
 以上も飲まばも見えられ
 ども原来性罪の非を只遮
 罪なりと俱舎も見えらる。
 されば時の宜しき縦ひ飲と
 有とも正念を失ふべしとて
 本意とすべし。又審積經に
 一とてい女人はみれば眼の
 功德は失ふべしとて縦
 大蛇と見るといふも
 女人を見るべしとて
 といふ。或は女人の
 百悪の長と薬師
 本願經不出
 たり



尤是も小乗の
 教をいふも
 肉食妻帯の
 宗旨をいふも
 坊主あふぬと振
 立酒池肉林の
 貨食亭いふも
 或は遊女の寺と携
 柳巷と戯歩行き
 畢竟祖師の顔
 小泥を塗かごとい
 嗚呼唯出家へ出
 家らば殊勝の
 挙動こそあま
 けい

三國七高作傳圖卷二

色と懸く。道路の縦横人を觀るを礙るを礙見る。既小此相を見己して即便
 休止して七日不食して。上來あもる靈相の本心物の為ありて。己身の為にせず
 既小此相と蒙りて。敢て隱藏せば。謹で以て義の後小申呈して。聞を未
 代小被らむ。願くはこれと一切の衆生小聞して。信生せし。有識觀者
 して西小歸せし。此功德を以て衆生小回施して。悉く菩提心と発し。
 慈心と以て相向ひ。佛眼を以て相見。菩提の眷屬として。眞の善知識
 とあり。同淨國小歸して。其小佛道と成ぜん。此義己小證と請て定早ぬ
 一句一字加減をば。寫さんと欲する者ハ一經法の如くせよ。應不知多し。
 と書置たまふ。尤是より前の高僧方の佛の正意小違ひなく。是非ハ
 是ハ上より如く。淨影大師天台大師等の高僧觀經と見損ひ。佛の正意は
 りんを五逆十惡具諸不善の惡人女人を本とつる。超世の願意と云ふべ
 上品大衆の善人。云て假小極惡の凡夫の爲の經と云ふ。爲未來世一切

衆生爲煩惱賊之所害者の釋迦の正意も隱没して。頭れると。善導大師
 古今と指定ましく。淨影天台等の謬解と糾。佛の正意二尊の賜と探りて。
 注釋したるあり。誠小善導大師一代の化導と案じり。其自行と云ふ。頭然と
 拂ふ如く。佛前小向うて念佛は。寒天小汗と流し力を尽して。暫く
 小休す。三十余年の間一夜と寢所小入なき。帶紐脱く。女小卧むと云
 小行水の外衣と脱る。三十年の間目と初きて。女人と見む。一切の名利と離れ
 假小戲の言う。あまると言間あれば。念佛と云ふ。眠る間あれば。称名相
 續したる。實小行行狀の堅固なると。双入ると云う。問云。其行狀ハ
 全く聖道の行ふして。横川大師の外儀の相異りと言ひ。又男女貴賤悉
 弥陀の名号と称む。小行住坐卧も。時處諸縁も隔り。と云ふ
 相違と云ふ。非む。答て云。是ハ畢竟僧分の行儀なり。尤それ頃ハ聖道
 盛なり。と云ふ。行狀嚴く。凡ハ人の信仰なきが故。小先自行と堅固

佛身光明と放く善導の口より出たす尤善導の化導深切なりと云ふ。
 末世の衆生疑ふも多し。是と暗き人爲に經藏と盲探すはのひ。又十方の諸佛釋
 迦彌陀二尊を證を請ひ四帖の疏と書りては毎夜一人の僧未りやひ
 玄義の科文と指授しり。是則極樂の教主阿彌陀如來の指圖を依りて
 善導が了簡あはれども。寫して拜見せんと思は。佛經の如く敬ひ一や一善
 増減とくべ。説のま信ぜよ。宜まふ。觀經の觀迎の直説をれと阿彌陀如
 來の御指圖よりて書たる程あり。三昧發得の善導の御教化よりて
 びまよ疎はなれも別して大切なる御教化より上も云々。天台大師妙宗
 抄と作りて觀經と注釈しり。淨影嘉祥も注釈を加へども唯十六觀法
 と説く。佛の本意を心得く隱彰の實義と知りて下下品の臨終の
 十念を往生と説く。散亂の念佛あり。正しく觀念の念佛の功德
 の勝る故なり。若し今日の衆生平生より定水と凝せ。識浪頻不

動さ。心月と觀れば妄念の雲覆を靜る暇あり。况や臨終断未魔の苦。
 火の車小腰とくけり者。何ぞ觀念小堪ん。然る小善導大師佛の正意と
 窺ひ給ひて。汝若不能念者。稱南無阿彌陀佛とあれ。觀念とて能ま。
 火車とて南無阿彌陀佛と口稱へ。往生とて。善知識の勧めと聞て。
 如是至心と稱へ。往生とて。心を受へ。一念は往生一定して。具足十念
 の稱名なり。往生治定の上の佛恩報謝の稱名。されば下中品は。聞已
 即生と説き。一聞一念小鑊湯憂。涼風となり。爐炭化とて光蓋となり。
 釵の樹ハ七宝樹林。火の車ハ金の蓮華。牛頭馬頭の獄卒ハ。觀音勢至二十五の
 菩薩と轉じて。花々き往生と逐る。十稱の念佛と釋し。現在火車の迎
 と受へ。極重の悪人なれも。臨終の十念よりて往生と説く。六別時意の方
 便あり。今直往生と云ふ。遠生の結縁あり。撰論家より難じり。
 故小善導大師會通。今此觀經の十稱の稱佛八十願ありて。十行具

足す。云何具足と云南無と云歸命なり。亦是發願回向の義阿彌陀佛と云
 即その行なり。此義と云つての故に必ず往生と云とて得と釈し。凡夫の稱
 カチあり。本より六字の名号不願行具足し。と聞。信むる一念
 發願回向し。之る大願業力の働なり。と明らる。前々の高僧の上より
 ても古今指定の疏と著りて佛の正意と願ともハ善導獨と云も妨
 あり。此觀經ハ曇鸞大師ハ菩提流支三藏より付屬の經也。道綽禪師
 安樂集の據も又觀經をれも取と望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名
 と恐るも。突出と。弘願他力の本意と云。善導一師なり。尤此觀
 經ハ大經と違ひ。自力の眼よりハ分難。經より凡三部經の說相と云。大
 經ハ十五夜の月に一欠の曇る。如く弘願眞實の月明ら。不見也。相其
 村雲の如く。て月不暈の如く。如きハ阿彌陀經の如く。眞門の月ハ見を
 あれも。未自力の曇る。弘願の月を定散の黒雲。覆と云。則觀經の說

相も。此經ハ隱彰顯密と云。と云。りて頭說の方。九。自力の觀念彰
 の字と云。時。の定散の村雲の中。在ハ弘願の月。かち。と光。見
 せ。是本法藏比丘願力所成と。四十八願の月影と見。念佛衆生攝取不
 捨と十八願の月眞丸也顯れ。又若念佛者當知此人。是人中芬陀利華と云
 と影と拜せ。全。夜明の月の入際。ハ汝好持是語持是語者。即是持
 無量壽佛名。村雲ハ。暗。南無阿彌陀佛の満月と云。西の空
 隱る。其月の實躰と見附た。古今あり。善導と云。明。見
 出。之。尤龍樹天親の二大士。曇鸞道綽の二師。も。是知。の。ハ
 ね。も。明。ハ。其中。ハ。勝。之。論。語。中。に。德。行。ハ。顔。淵。閔。子。騫
 等。と。四。科。を。立。て。書。た。れ。も。顔。淵。閔。子。騫。の。德。實。と。曾。子。子。路。等。ハ
 不。德。と。云。ハ。非。を。皆。德。ハ。備。た。れ。も。就。中。勝。と。云。方。と。取。て。上。と
 者。り。往。昔。釋。尊。十。大。弟。子。中。に。天。眼。弟。一。の。阿。那。律。頭。陀。弟。一。の。迦。葉

舍利弗目連
神通をくま



三國七高僧傳卷三



三國七高僧傳卷三

三十四

神通第一の目連智慧第一の舍利弗と云ふ。されば舍利弗ハ智慧第一と
 具へて神通第一と云ふ。智慧第一ハ神通第一と云ふ。目連も智慧第一
 神づくと得たり。智慧第一ハ神通第一と云ふ。目連も智慧第一
 第一と稱するなり。大論の四十五卷目ハ釋迦如來無熱池と云ふ池の邊
 御身おび弟子達の本業因縁と説く。五百の羅漢も其會ハ列ぬ
 然るハ舍利弗ハ入參着る也。狀尊目連ハ命ハ呼來と云ふ。宣ハ佛勅ハ
 鳥の飛ガ如ク祇園精舎におりて。佛勅の趣きとつげぬ。折ハ舍利弗袈
 裟と縫て居る。暫ク待りて。此袈裟と調へて行へり。目連ハ
 目連と云ふ得たり。待りて。良時と云ふ。待遠思と云ふ。待遠思と云ふ
 年と云ふ。彼袈裟と云ふ。撫られぬ。忽袈裟の仕立調へり。出未
 くれハ參りて急ぐ。是の時舍利弗目連の神通と試んて。一條の帶と
 大地ハ落し。其帶と取て。是れ夫と云ふ。同伴と云ふ。目連何と氣

其帶小手と云ふ。大須弥山の如ク地ハ引つて動く。忽目連禪定ハ入
 大神通と起し。上んとも大地震動と云ふ。此時如來の所居た
 まハ橋陳女何カ也。斯ハ大地の震し候也。如來ハ問奉られ。釋尊宣
 是ハ祇園精舎と云ふ。舍利弗の帶と上んとも目連ハ大神通と振ふ故
 不斯震動と云ふ。何と云ふ。目連ガ力と上る。夏ハ成ると云ふ。有然ハ
 舍利弗も斯神通ハ有ると云ふ。其一分ハ當て稱する時ハ目連と神通
 第一と云ふ。舍利弗と智慧第一と云ふ。如ク何ハ疎ハると云ふ。觀經の云
 彌陀釋迦諸佛三佛の正意と頭と云ふ。善導大師の御手柄と云ふ。
 或問曰。善導大師三十余年睡らぬと云ふ。大師ハ亦云。但睡眠ハ欲界の
 衆生ハ能く故ハ觀經ハ唯除睡時恒憶此事と云ふ。大師の睡
 眠セらぬハ祝と云ふ。過りぬ。答て曰。大師の睡眠セらぬハ願ハ勤めて眠
 らぬハ非ズ。三昧發得て。常ハ三昧正受ハ入定散自在なる故ハ自覺睡眠

上二界色界無色界。小睡眠る如く。亦れも欲界の衆生も睡眠欲あり。
 何ぞ睡眠るをわんや。よて大師の往生禮讚。唯除睡眠時常憶念と云。
 又或人法然上人念佛の如く。睡眠をたてて行と怠待と云。此障を
 侍人と申されば。目の覺たんと念佛の如く。甚尊と云。又善導大師は目と奉て女人と視るを言。是別して身業の過を防ぎ
 又善導大師は目と奉て女人と視るを言。是別して身業の過を防ぎ
 のを明く。故小思谷七ヶ条の中も。此行狀の趣本律の制も過ると
 言へり。問曰大師の女人と見るは身過を防ぎなきや。寶積經。一見女人
 矢眼功德よ。縦雖見大蛇不可見女人と云。若尔ら大師の自行
 亦不恐。化他と失せん。他力本願の正意の極悪の女人と度も。大悲の至極と
 顯せり。都く女人百惡長願經出。小して障道の目縁有り。故小經の五障三
 從の如くと説法華の五障と明を大論九十九の三後と明を又超日明三昧經に並五障三從
 人師八十惡と數ふ南無の淨戒觀。三障。真指下。或ハ女人の地獄の使能斷佛

種子も云。此を以て弥陀の別願極悪と化すと云。女人は定めて往生すべし
 ばと疑ふ。故別して女人往生の如く。三十五の願と云給ふ。是則深重の大
 悲の至極なり。女人と捨り。亦れが善導大師の自行の恐く。聖道あり
 たる御ふまひ。他力真門の正意あり。答て曰。起世本願の不思議
 重障の女人と清い給ふ。理在絶言あり。但善導の女人と見るを。此障
 の大悲の違背。女人と捨り。亦れが非也。又身業の過を防ぎ自行の慎む。非
 非也。元々弥陀同体の大悲の如く。御出世の如く。善導の女人と見給
 ふ。女人と憐れむ。大悲の説法。其故は重障の女人往生も。本願の
 大悲止と云。得ざる故。假令信ありて念佛も。女人と見給ふ。記者と云
 小の如く。然るも今時の女人た。念佛も。時善本修習の思は。自
 力雜善の執情。ま。ま。知識の親く。迫り。得法投扱。法然上人
 云。他の不信者と。謾に我賢と云。増上慢と起。法然上人

大小戒をうたひて此心より安心しむ。自力定散の祝して往生す。彼妻好し。女の性ハまふひびり。人我の相よく貪欲甚く。物の理もはば只迷の方ふ心もよく後。詞もたよく苦く。ぬ事も問はれ言は用意あり。見えへ又浅き死して問はれ言出も。深く欺飾も事ハ男の智慧も勝る。かと思へ。其も跡も顯る。と知らむ。直ぐはて拙き者ハ女なり。徒然又女人と出家し。誦經念佛し。若く受戒持齋せる者。其慢心を發し。人我を高き無戒の出家と見てハ謗護する者多し。已う失顧る。空腹高心。信心ハ少もか。これハ百歳の老比丘尼なり。今日初發心の沙弥の足とて。禮せし佛ハ宣へり。今時の比丘尼の發心修行ハ法滅の因縁する。と知る。身と高き。實ハ浅き。は事なり。毘尼母經の意。女人ハ心詣曲る。法器ハあり。びて出家と許しぬ。釋尊の姨母憍曇弥。摩耶夫人。阿難ハ近づく。出家と願ひ。釋尊

許し。其時憍曇弥五の恨と奉て釋尊と恨たまふ。是より如來止夏と得て出家と許す。此時同時小女人多く出家せり。されば如來の正法一千年住まふ。女人ハ出家と許す。正法五百年して滅する。されば女人の出家ハ法滅障道の惡縁とる。三宝紹隆の善縁ハ非ざり。尼僧頂きと撫て慙愧す。故ハ善導大師ハ他力還相の大悲とあり。女人と見給はる。故ハ諸の女人身と願て慙愧す。實ハ二代教の中にも嫌はれて在る處も擯出され。女人ハ破る。石ハ再び合する。火の中に蓮と生ず。女人ハ永く成佛せ。とす。彌陀如來起世別願の大悲とく。佛智の不思議とあり。女人成佛の誓と成り。故ハ念發起のときも不可思議の取力とて往生と治定し。臨終のときハ變成男子の姿なり。紫磨黄金の膚とあり。三十二相の形あり。忽彌陀大會の中ハ入。彌陀同体のさりと顯る。無上涅槃の佛果と証せん。とす。他力の佛思は。南无阿彌陀佛く

と称名と喜ばらん為小善導の目と奉て女人と見ゆる也然ば女人とん
者ハ吾身の拙く障了重きと改悔して佛恩の称名とよむる也

斯く善導大師一代の行化を了る終る唐の高宗皇帝の永隆二年辛巳三月

廿七日帝五十六或十四日新修春秋六十九歳して往生す日本四十七代天武

天皇白鳳十年小あり真宗三月廿七日善導忌を修す

右入滅は付て二説あり新修往生傳の意ハ一時住りて長安の寺院

ありて淨土の變相を寫し小急小催促して成就せしむあま人其由を

問ハ則曰く吾まゝ小往生せんす住りて西三夕のそと忽然とて微疾

ありて室と掩ひ怡然として入滅しを言り又蓮宗宝鑑あり新修傳

の意ハ忽ち人小謂て云く此身厭べし諸苦逼迫も情偽変易暫くも休息

とてか。吾將小西小皈えんすと則光明寺の前なる柳の樹に登り西小向

發願して終る其樹上於て端身立化し身と投りて絶るとす端身立化

とハ柳樹の上小立て合掌發願して終るとハ靈神化して淨土小生ぞ神已と云

故小尸地小落と身と投りて自絶とす。京都の士大夫婦依仰信して

骨と収りて葬る高宗皇帝其念佛をれり光明の出を知り又捨

報の時精進至誠とてと叡聞し寺の額と賜りて光明寺と号す

斯の如く兩説ありとも大権の聖者の入滅ハ祝縁小隨て見と異らす

龍樹の入滅ハ二説天親往生の二説縁小順て化と設く一准とす

但捨身とて今時無智の僧の縊れて死るとの類ハ小傳文と

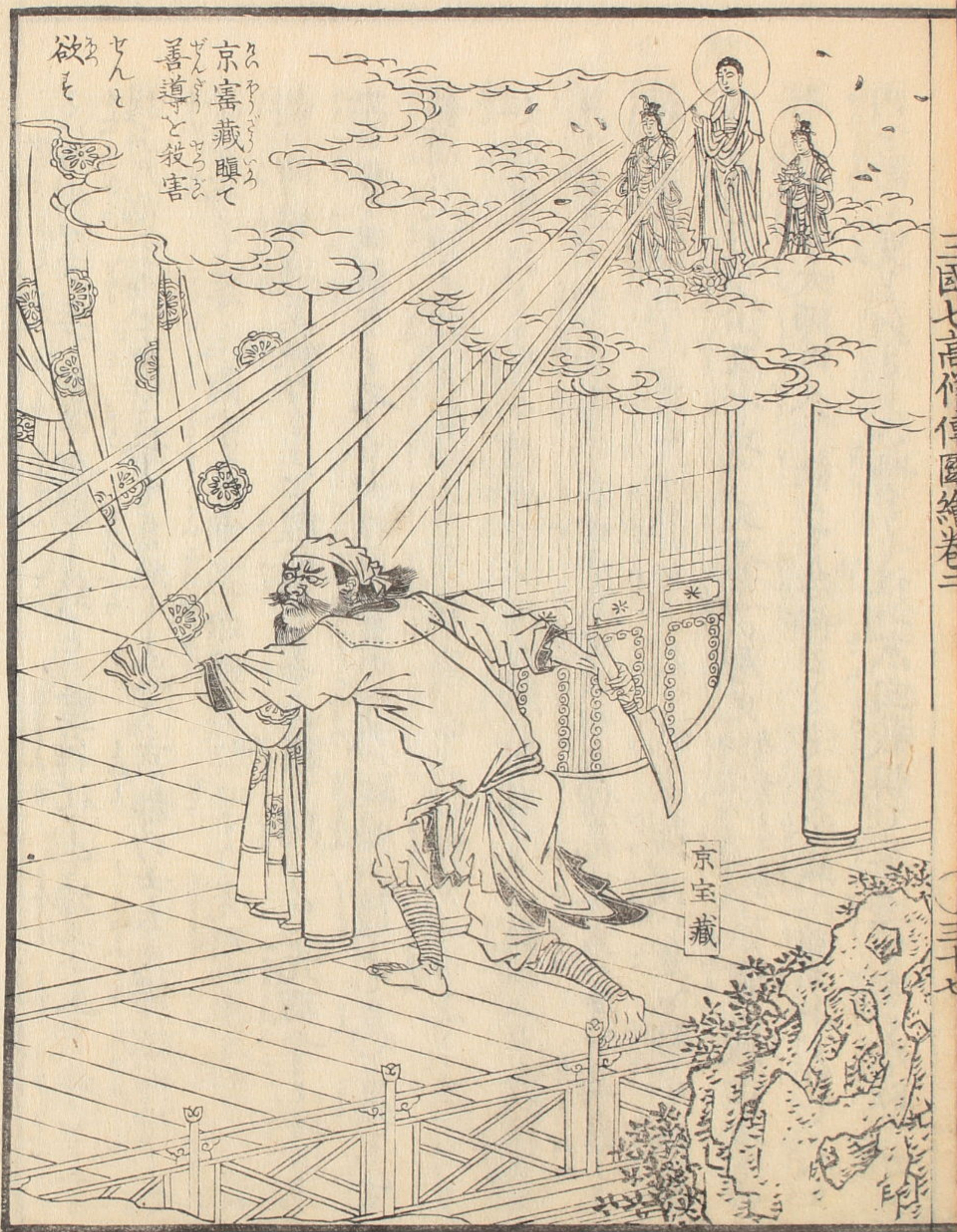
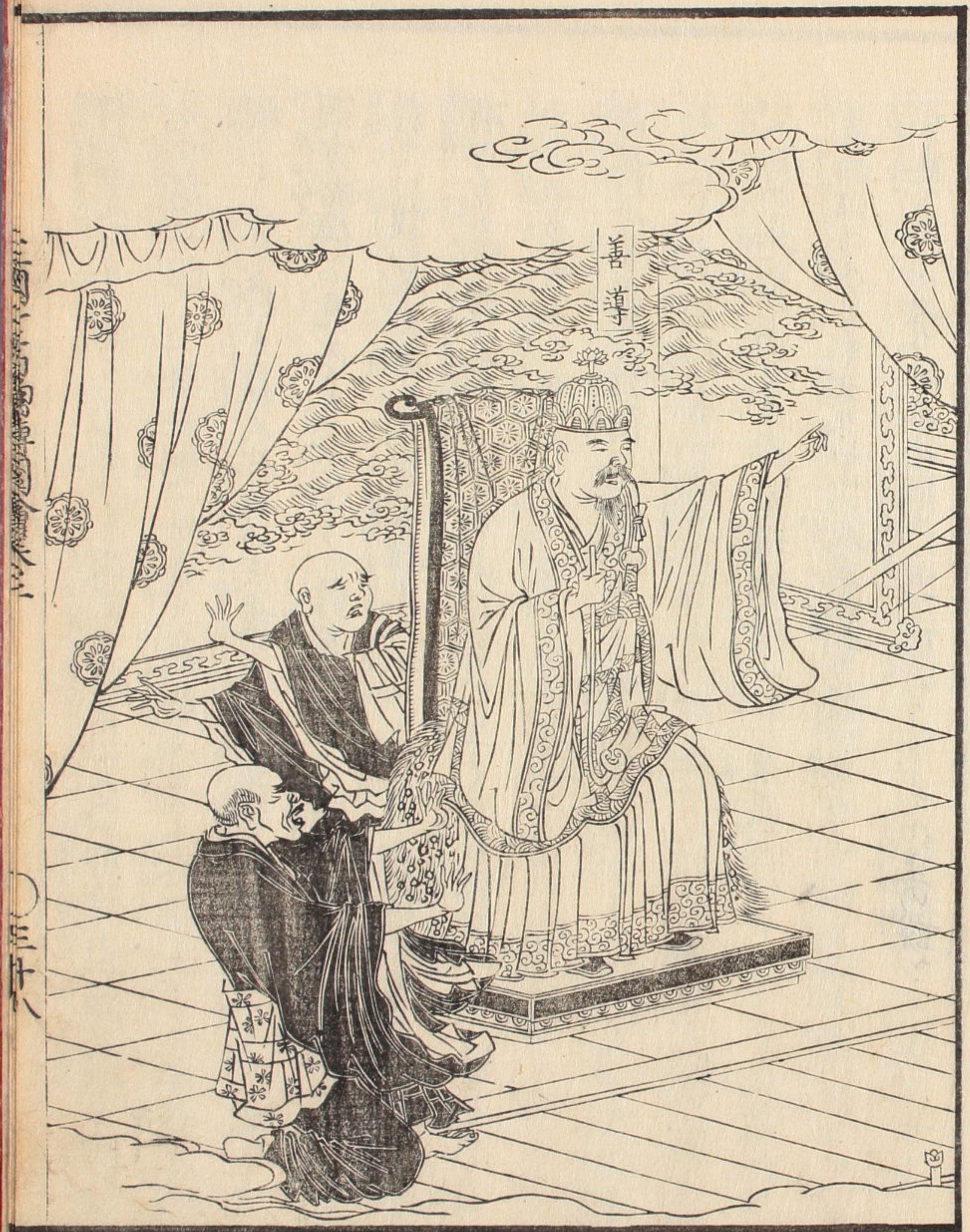
見てあるハ尤善導の在世小京師諸刹の僧尼士女或ハ身と高嶺より

投り或ハ深泉小身と沈め或ハ自ら高き枝より墮或ハ身と焚て供養

ヤ者百餘人小及ぶ。又長安の屠兒牛鹿と屠りて京密藏とてその

あり善導大師の人と勸めて念佛とす。長安城小満る小して人々

肉と斷り買ひて無り。程小京密藏瞑て善導と害せん欲しカ



持て寺にあり。師と見く西方と指示し、即浄土の相と現む。是と見て忽改悔し。一念發起して自ら高樹の上より念佛とて十聲の樹より墮て給る。衆人化佛の天童と引く宝藏頂門より出ると見ると西方略傳に見えり。此の如く捨身する者有るとも末代の下板に於てハ慎むべき事なり。自害往生入水往生等ハ念佛者のよろしからず。所より源空上人深く戒つるまれば生るハ念佛の功とて死むハ浄土に参りんとす。女が宣つるありが如く諸傳ハ善導ハ弥陀の化身なりと云ふ付て古より二説あり。一ハ化身とて無而歎有の化生あり。胎生とて生じり。諸傳ハ父母の生所とて生れども瑞應傳ハ朱氏泗州の人なりと云新修傳ハ臨淄の人なりと云。二ハ無而歎有の化生あり。胎生あり。故に父母生處ありと云。あれども胎生とて勝りとして化生の説とて父母生所と

傳ハ云々ハ諸傳ハその例多し。又俱舍論ハ依る釋迦如来胎生受たすハ舍利とて利益せんあり。化生ハ骨あり。身ハ善導ハ捨身遺命ハ骨と收て葬り。此故に化生あり。父母の胎内ハ宿りて生れり。故に朱氏の子なりて生れり。瑞應傳ハ物にて善導大師世に出た云々ハ阿弥陀如来ハ衆生ハ代々願行と圓滿。十方衆生の往生と躰して正覺の阿弥陀佛なり。正覺の外ハ往生あり。故に一心念佛ハ致命し一向念佛して本願ハ修む時ハ心安き往生あり。一切の衆生本願非本願の差別あり。正行雜行と分たす。自力他力の界と弁す。此とて本願の方ハ何の煩も成り。往生する者ハ自力の執心あり。難行雜修自力善本と勵めて空しく生死ふ事と悲し。永劫五劫の辛苦も其甲斐なく思召。阿弥陀佛同体の大慈やむと得。生後園示現。煩惱の林ハ同入。隨類

應化おうけの形かたちとあり。惡人あくにん女人にょにんの先達せんたつと成なて。報土ほうどに往生おうじやうして。やと化けして。化け
 教化けうかせん。あふ出世しゅっせして。あつる街まち身みる。れが直ちか為なり彌陀みだ私誓しせき重ちゆう致ち使し凡夫ぼんぷ
 念ねん即じつ生じやうと釋しやくして。在家ざいけも出家しゅっけも善人ぜんにんも惡人あくにんも男子なんしも女人にょにんも諸しよの雜行ざくぎやう
 雜修ざくしゆと振捨ふりすてて。一向いけう一心いしんに彌陀みだとたのむ。生なまれのみ。つて念ねん佛ぶつを勸すすめ
 り。を。られ。無む而に忽とつ有うの化生けじやうして。出世しゅっせして。わして。一切いっけつ衆生しゆじやうを。愍退みんたいの思おもひと
 生なまむ。を。の。中なかつに。教化けうかと受うむ。れ也。故ゆゑに。生なま死し分ぶん段だんの肉身にくしんと受う流轉りゆうせん迷ま妄まう
 の凡夫ぼんぷと。る。て。自力じりき雜善ざくぜんと捨すてて。一向いけう念ねん佛ぶつして。佛ぶつ思しと喜よろこむ。わ。あり
 胎生たいじやうして。けり。又また長安ちやんげん城じやうの滝たきに。金色こんじきの四しの偈げあり。れ。大師だいし化生けじやうして
 淨土じやうど安心あんしん集じつの中なかつに。引ひき。是これ大だいの偽いつはりして。笑わらと千歳せんざい小殘せうぜん也。此こゝを
 朱女しゆにょく。光明くわうめい大師だいし別傳べつでんの注ちゆうに。見みえ。一旦いつたんに。言い盡じんく。志しあり。ん。の。彼傳べいでんと
 披閱ひえんへ。又また半金色はんこんじきの尊形そんがたに。南無なんぶ阿彌陀佛あみだぶつの六字ろくじと表あらわす。名な躰たい不ふ離り
 の故ゆゑに。六字ろくじ即じつ彼佛べいぶつ躰たい也。され。腰こしより。上うへの墨衣ぼくいに。南无なんぶの二字にじ。即じつ我われ等らが。飯いひ

命いのちの色いろ心こころなり。下したの金色こんじきに。阿彌陀佛あみだぶつの四字しじ。す。か。り。助すけけ。の。佛ぶつ躰たいなり。法ほふ也
 報土ほうど得生とくじやうの行躰ぎやうたいなり。あれ。凡ぼん心しん佛ぶつ心しん機法きほふ一いつ躰たいの南无なんぶ阿彌陀佛あみだぶつと表あらわ顯けん
 して。半金色はんこんじきして。化生けじやうして。わ。あり。ん。淨土じやうど門もん

三國七高僧傳圖會震旦之卷畢

